

文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

(54)

石原 昌家



サイパン戦の連戦52回目で、沢庵少年の証言に衝撃を受けた読者から「せつか民は、手榴弾を用いて」「助かったのになぜ首吊り自殺が続出したのだろう」という声が寄せられた。私も沖縄戦での生存者が収容所で「自殺」ということは聞いたことがなかった。当初不可解だった。だが、それは連戦53回目

の体験で推測できるかもしれない。追い詰められた住家は、手榴弾を用いて「全家滅」する家族が続出していた。長堂さんは家族を引き連れて必死に逃げながら、他家の「全家滅」している様子を見たらうらやましかったという。子どもが1人でも生き残ってしまったら大変かと思ひ、長堂さんは手榴弾を爆発させる

決断がつかないうちに長男がそれを捨ててしまった。それで助かった。その証言で、子どもたちが死なれて一人、異郷の地で生き残った大人が悲嘆のあまり「首吊り」したのではないかと私は想像している。既述の先輩同僚・高宮城大東島へ出稼ぎに行つてい

海南島 (上)

日本軍が中国人虐殺

2県人目撃、「血の海に」

数人も加わっていて、全国う名前と呼ばれていた。さらに沖縄女性も1人混じっていたが、沖縄男性に身元が知られるのを恐れて、話しかけてもそれに応えなかったという。ときにはトラック数台で島一番のにぎやかな町にくりだし、中国人女性のみの慰安所へ遊びに行くこともあった。そのような軍属生活の中で、2人は、中国人虐殺事件を目撃することになった。

慰安所

荒仕事軍属生活は、酒飲みと酒を飲まないグループに分かれ、酒飲みグループは毎晩のように命を落としかねないほどの喧嘩が絶えなかった。高宮城さんは一滴も酒は飲めないと周囲に嘘をついて禁酒を誓い、こつこつと酒を飲んだら命取りになると思った。屋良さんも同様だった。

島内には陸軍、海軍、設営隊の兵士と軍属のために「連合慰安所」が設置されていた。慰安所は女性奴隷は、海南島へ牛を捕りにきたの当り、花子、ナミ子などとい

一斉射撃

(以下、聞き手の石原、カッコ内は石原が補い、二人の証言は会話のまま記録)。

高宮城 海南島も事件はありましたよ。便衣隊(民間服で偽装したゲリラ兵の意味)が、支那の本国から海南島へ牛を捕りにきたの

です。日本軍は、彼らの行動を初めから密かに見ているけれど、船一杯に積んで、沖合に出た所を船も半

も人も諸共に全部捕まえて引張ってくるのです。見張り人が双眼鏡でちゃんと見張っていて、無線で連絡をとって捕まえるのです。石原 船は出て行ったの、それを引張ってくるというの、どんな風にするか。

高宮城 船を出させておいてから、沖合で日本軍が周囲を取り巻いて、銃を突きつけた形で誘導してくるわけ。30名余りでした。

屋良 その時が一番多く殺されたね。高宮城 30名余りの便衣隊をトラックから運んできて、穴掘って、一人一人そこに座らして銃剣でやるの。その前にひざまずかせる。その穴の前には引張つておられたら、歩けなくて、足もガタガタ手もガタガタしておる人もおれはね。また、すぐ海は近いから、海の方に2人を「わざと」逃がしてね、海に入つたところで一斉射撃をするのです。それを遠く離れて

も海が血で赤く染まるので、当たったのはすぐわかりますよ。石原 これは、だいたい何名の人が目撃していますか。

屋良 たんさんいるよ。高宮城 兵隊が、軍属も首斬りがあるから皆行つてみなさい、というんだからね。それで沢山の人が見について、ぎっしり詰まっていたよ。

屋良 しかし、見に行つたら、穴の手前で斬るから、穴の向かい側で座ってみていたら、返り血を浴びるんですよ。水鉄砲のように血が、跳ねるんです。こつこつで斬つたら、

高宮城 首斬つたらね、大きい血管から血が砂に穴を開けるんですよ。穴開けるくらい血が出るからね。屋良 向かい側には座れて、穴を掘ってあるでしょ。その前にひざまずかせる。そして首斬ると、すぐにスットンと穴に落ちるのです。

高宮城 穴に落ちる時、血がすぐ飛び出るからね。石原 (軍属の) みんながそれを取り巻いて見物しているわけですね。(以上、証言より引用)

この凄惨な場面を2人は淡々と語り、私は可能な限り根掘り葉掘り聞きだすことに努めた。2人の証言はまだ続いていった。(次回13日掲載)

繁さんの「沈黙に向き合う」姿勢は、中国で皇軍兵士たちの斬殺場面の目撃者の実父とその友人をも説得してくれた。これほどの凄惨な話を同じ体験者2人から同時に聴けるのは奇跡としか言えないことだった。

海南島への軍属移民

高宮城美盛さん(1902年・明治35年生)と屋良朝松さん(1914年・大正3年生)は、同郷(旧北谷村上勢頭)同土だった。

高宮城さんは28年(昭和3

年)、フィリピン移民していたが、39(昭和14)年に母危篤の電報で帰国した。その時母はすでに他界して死なれて一人、異郷の地に生き残った大人が悲嘆のあまり「首吊り」したのではないかと私は想像している。既述の先輩同僚・高宮城大東島へ出稼ぎに行つてい